
意外な伏兵

ユーリ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

意外な伏兵

【Nコード】

N1078C

【作者名】

ユージ

【あらすじ】

『青の古城探索事件』の分岐小説。分岐小説の第3弾。

(前書き)

これは単行本20〜21巻収録の『青の古城探索事件』の分岐小説です。

展開が少しちがいで、哀の性格が少し明るく、歩美の性格が少し冷静になっています。

私の名前は灰原哀。

江戸川コナン君の同級生で、少年探偵団の1人。

といっても、小嶋君達になかば強制的に入れられたんだけどね。

今日、私達少年探偵団は、阿笠博士のビートルで山奥にキャンプをしに来ていた。

ところが、やっぱり私達にはハプニングが起こった。

博士が肝心のテントを忘れてしまったのである。

博士は、小嶋君と円谷君に『ダサイ』だの『バケーションが台無し』だの、さんざんな言われようだ。

おまけに、道にも迷ってるみたいだし・・・

工藤君が、『どうやら今日は、車の中で野宿になりそうだな』と言った。

吉田さんは、『えーっ！』と言っている。

野宿かぁ・・・

野宿でも、工藤君の隣で寝れるのなら、私・・・

・・・って、何考えてるの、私!?

私は、顔が赤くなった。

円谷君が、『どこかに宿泊施設くらいはありますよ』と言う。

確かに、普通はあるものだけど・・・

続いて、吉田さんが『そうそう、湖の見えるお城とか』と言い、工藤君が『んなムチャな』と言った。

私も、最初は工藤君の意見に賛成だったんだけど、ふと反対方向を見ると、湖が見えるとまではいかないけれど、大きなお城が見えた。そして、私は工藤君に向かってつぶやいた。

哀「あら・・・ムチャでもないみたいよ・・・」

たどり着いた先にそびえていたのは、西洋風の大きなお城だった。私は、どうしてこんな所にお城があるのか、疑問だった。

工藤君が「金持ちが外国の城を買って、バラしてこつちで組み立てたんだ」と言う。

さすがは工藤君ね・・・

すぐに私の疑問を解いてくれる・・・

私、そんなあなたが好きなのよ・・・

と思っていたら、小嶋君が「中に入って探検する」と言いだして、柵を乗り越えて中に入ってしまった。

そ、そんな事したら・・・

ガツ!!!

田畑たはた勝男かつお「41」「こら、どこのボウズだ!? 勝手に入りやがって!!!」

案の定、庭師らしきおじさんに捕まって、どなられた。

私は、前に偽札事件の時目暮警部にどなられた事があったせいなのか、おじさんのどなり声にビクツとなった。

私は慌てて、工藤君の後ろに隠れる。

博士が「ここを見学させてほしい」と交渉を持ちかけたんだけど、初対面のこの人が素直に交渉に応じるワケがない。

勝男「帰れ帰れ! ここはヨソ者の来る所じゃ・・・」

その時、後ろから声が聞こえた。

間宮まみや満みつる「49」「おや、誰ですかその者達は? 今日ここを訪れる客人はいないと思っただが・・・」

勝男「あのアホ面のジジイが中に入れろって・・・」

阿笠「アホ面ってアンタ・・・ワシはちゃんとした科学者じゃぞ!

!!!

満「科学者・・・?」

阿笠「ええ・・・ワシは阿笠博士という少しは名の通った発明家じやよ・・・」

博士の後ろで、工藤君が苦笑いをしている。私も、苦笑いをせずにはいられなかった。

自分で天才っていうなんて・・・

博士の話の聞くと、間宮満さんは顔つきを変えて、私達を中に入れてくれた。

その上、一晩泊まっていつてはいかがかなと言ってくる。

工藤君が『マジでこんな所に泊まる気かよ』とでも言いたそうな顔をした。

でも、野宿するよりはマシでしょう、工藤君。

まあ私は、工藤君となら野宿してもよかったんだけどね・・・

・・・って、あああ！

また私、こんな事考えてる！！

私は、また顔が赤くなってしまった。

しばらく進むと、チエスの駒が多数並んでいる庭があった。

駒だけじゃなく、芝生が刈り込まれて、チエスボードになっている。チエス好きの人でもいるのかしら？と私は思った。

庭師をしている田畑さんの話だと、前の旦那様の貞昭という人のおいっつけで、毎日手入れしてこの状態を保っているだけだという。

なんでも、15年前に亡くなった大旦那様の遺言を、その貞昭さんが受け継いだんだとか。

前の旦那って事は、さっきの満さんは2番目の亭主って事ね・・・

その貞昭さんは、6年前に病死したらしい。

そして奥さんも、4年前の大火事で亡くなってしまったという・・・

林の向こうに見える焼け焦げた塔に、奥さんの寝室があつたらしい。火事が起きたのは、奥さんが大奥様の誕生日を祝うために、久しぶりに城に戻った直後……

真夜中に到着して、夜が明ける前に火の手が上がったという。

奥さんだけではなく、奥さんの友人や、大奥様に長年仕えていた召し使いや執事達十数人も、炎に飲まれてしまったらしい。

難を逃れたのは雇われて日が浅かった田畑さん達使用人と、カゼをひいて別館で寝ていた大奥様と、奥さんより一足早くここに来ていた満さん……

そして、博士の後ろの方で白いポーンに手を添えている人……

奥さんと貞昭さんの御子息、間宮貴人さんだけ……

貴人さんは火事が起きる2、3日前に戻ってきた人だけど、子供の頃から外国に留学していたらしく、田畑さんが最初にあつたのは火事が起きた日が初めてだったという。

そして満さんも、奥さんが満さんと外国で再婚した後ずっと外国で暮らしていて、会つたのは大火事が起きた日が最初だったとか。

ただ、満さんも貴人さんも、あの大火事以来この城に留まり続けているらしい。

まるで、何かにとりつかれてしまったかのように……

私は、顔をあまり知られていないので、城に入る時苦労したんだなと思った。

ところが、満さんの顔は奥さんが写真を送っていたから田畑さん達はみんな知っていて、貴人さんは大旦那様と顔が瓜二つだった。

これなら、誰が見ても親族だとわかるワケだ……

大旦那様の肖像画の両脇には、貞昭さんと奥さんの肖像画があつた。貞昭さんは歴史学者でもあつた大旦那様の事をとても尊敬していたらしい。

でも奥さんは、『お父様はただの理屈っぽいインテリにすぎない』と言っていたようだ。

大広間に、その言葉を言いながら、車椅子に乗った間宮家の当主、

マス代さんが現れた。

マス代さんは博士が科学者だと知ると、『楽しみじゃ。あの人がこの城に込めた謎、ぜひ解き明かしてもらいたいものよ』と言った。なんでも、大旦那様が死ぬ間際に、『この城の謎を解き明かした者に私の一番の宝をやる』と遺言を残していたとの事。

マス代さんは、『奥さんが来たら部屋に連れてこい』と言い残し、部屋に戻っていった。

数分後、庭のチェスボードが見渡せる部屋を田畑さんに教えてもらった私達は、その部屋を訪れていた。

工藤君は、なにやら熱心にメモ帳に書き込んでいる。

私はクスツと笑い、工藤君の元に歩み寄った。

哀「よかったわね・・・それ、あなたの大好きな暗号でしょ？ちがうの？」

コナン「いや・・・そうだと思うけど・・・」

工藤君は頬を赤く染める。

私の顔は、徐々に彼に近づいていった。

もう少して、工藤君と憧れのファーストキス・・・

私は、顔が赤くなっていく。

私と工藤君の唇が重なるうとした、まさにその時だった。

歩美「ちよっとー！！2人とも何やってんのよー！！」
ビクウツ！！

吉田さんの叫び声に、私はビクツとなった。

ち、ち、ちがうの、吉田さん！

私、工藤君にキスしようとなんてしてないって・・・

歩美「落ちちやうよー！！」

・・・え？

落ちる・・・？

どうやら、小嶋君が落ちそうになっていて、それに吉田さんが気づいたらしい。

工藤君は、隣の部屋に走っていった。

その後、事件が起きた。

なんと、工藤君がこつぜんと姿を消してしまったのだ・・・！！

私は、工藤君が姿を消してしまった部屋をのぞいてみた。

見ると、時計の近くにイスが倒れ、本が散らばっていた。

それに、時間も狂っている・・・

まさか・・・

工藤君は・・・

私はイスを立て本を置き、その上に乗って時計を触ろうとしたが・・・

・
間宮貴人まみや たかひと「25」「コラ！！ダメじゃないか、悪さをしちゃ！！！」

貴人さんに怒られ、私は時計いじりを断念するしかなかった。

その後、私達は夕食に招待された。

工藤君の事が心配なのに・・・

でも、『お腹が空いては戦ができない』って言うし、先に夕食にしようかしら。

工藤君の搜索は、夕食後になりそうね・・・

にぎやかな夕食に、満さんは満足のようだ。

貴人さんが子供の頃は来客も多かったそうだけど、あの大火事以来めつきり来客も減ったんだって。

貴人さんは元々、外国の大学を出たら、この城に住んでのんびり絵を描こうと思っていたらしい。

満さんは奥さんを亡くされた大奥様を気遣って留まっていたけど、日が進むにつれて奥さんの生まれ育ったこの城が気に入ってしまったという。

でも、大奥様には気に入ったのが城じゃなくて、隠された財宝だとバれているようだ。

大奥様が部屋に帰った後、満さんが博士に暗号は解けたかと聞いてきた。

博士はまだ、暗号の解き方がわからないようす。

私は、『庭にあるチェスボードを作ったのが大旦那様なら、あのチェスの駒に謎を解くヒントが隠されているでしょうね』と答えた。

博士は感心している。

貴人さんが、『君はあの暗号が解けたのかい？』と私に聞いてきた。私は、『わかるワケないでしょ』と言い返した。

そう、私達が普通に解けるワケがない。

満さん達が4年も費やして解けなかったのに・・・

まあ解けるとしたら、この城のどこかに消え失せたミステリーグルメさん・・・

そう、工藤君ぐらいでしょうね・・・

吉田さんが、工藤君にパンを持ってってあげようと、袋をもらって来た。

やさしいのね、吉田さん・・・

私も袋をもらおうかなあ・・・？

ほどなく、満さんが工藤君の事を話題に出した。

工藤君がいなくなった事を聞くと、満さんは『あの塔に迷い込んで

なければいいが』と言い出した。

満さんの話によると、2年前にここで雇っていた新米の使用人が、一夜の内に姿を消してしまったというのだ。

聞けば、その人はよく『あの焼けた塔には何かある』と仲が良かったメイドに漏らしていたらしく、満さん達はすぐに塔を探したが見つからず、警察を呼んで付近一帯を大搜索する事になったらしい。

そして彼は4日後、森の中でやっと見つかったのだ。

やせ細り胃の中を空にした、餓死状態で・・・

大火事以来、焼けた塔の入り口は閉鎖していたらしく、使用人達の間では『焼け死んだ人達の霊が彼に乗り移った』というウワサが流れたというのだ。

それじゃあ、早く見つけないと、工藤君もやせ細って・・・？

小嶋君と円谷君が、吉田さんの袋に自分達のパンを入れた。

私もメイドさんに袋をもらって、3個のパンを袋に入れた。

そして、みんなで工藤君の大搜索が始まった。

庭には工藤君はいなかった。

森の中にもおらず、残るはあの焼けた塔の中しかない。

雨も降ってきて夜も遅いので、明日警察を呼んで付近を調べる事になった・・・

吉田さんは泣いている。

私は『大丈夫、江戸川君はあなたが心配するようなヤワな男じゃないわ・・・彼なら自分の脱出ルートぐらい自分で見つけ出せる・・・泣いてるヒマがあったら、パンが雨で濡れないようにしっかりと袋を抱えてなさい』と吉田さんに言った。

すると吉田さんが『どうして灰原さんってコナン君の事わかつちや

うの？もしかして、コナン君の事好きなの？』と聞いてきた。
するどい。

さすが、吉田さんね・・・

私は好きだと答えようかとも思ったけど、ごまかした方がおもしろいかと思ひ、『安心して・・・私、彼の事そういう対象として見えないから・・・』とはぐらかした。

吉田さんはうれしそうに、小嶋君達の元に走っていった。

ゴメンなさいね、吉田さん。

私も工藤君の事が好きなのよ・・・

それにしても、最近の子供はマセてるわね・・・

博士は、『便りが無いのは無事な証拠』といい、工藤君は大丈夫だ
という。

何ノンキな事言ってるのよ。

あの工藤君が、何時間も連絡なしに私達の前から姿を消すワケない
でしょう？

工藤君の身に、何かあったのよ・・・

この城の誰かに監禁されているか、あるいはすでに殺されているか
・・・

城の人に気づかれないように、警察を呼んで彼を搜索した方がいい
わ・・・

探すのはこの城の中・・・

もう目星はついてるわ・・・

そう私は言った。

しっかりしてよ、博士。

この状況で頼りになるのは、大人のあなただけなんだから・・・

博士と別れた私は、私達と面識のある目暮警部と横溝刑事の事を思い出し、博士に言おうと彼を捜した。

哀「あ、博士？どうせ呼ぶなら、私達と面識のある横溝刑事か目暮警部を・・・博士？」

しかし、博士はこつぜん姿を消していた・・・

哀「博士・・・」

私は辺りを見回した。

博士は電話をかけたはず・・・

私は警察に電話をかけた。

哀「あ、もしもし警察ですか？工藤新一の代理の者ですが・・・警視庁捜査一課の目暮警部につないでいただけます？」

コツ・・・

コツ・・・

哀「えっ!？」

満「おや？お友達に電話かい？お嬢ちゃん？」

私の後ろにいたのは、満さんだった。

哀「ええ・・・そんなところよ・・・」

私は電話を切った。

歩美「あ、灰原さん！」

光彦「ここにいたんですか！」

元太「オレ達の寢床の用意できたってよ！」

歩美「あれ、博士は？」

光彦「一緒じゃなかったんですか？」

哀「さあ・・・このお城の室でも探しているんじゃないかしら・・・

」

満「・・・」

私達は寢床に向かった。

いつまでたつても、私はなかなか眠れなかった。

哀「博士のベッドは空のまま・・・やっぱり何かあったのね・・・」

私は吉田さん宛のメッセージをさらさらと紙に書くと、それをそばに置き、コートを着て、部屋を出た。

私は廊下を走っていた。

哀「とにかく、調べてみる必要がありそうね・・・手遅れになる前に・・・」

私は後ろを振り返った。

誰かがつけてくる気配はない。

私は急いで、工藤君が姿を消した部屋へと向かった。
ヒタツ。

ガチャ！

私は部屋に入り込むと、本を数冊つかみ、時計のそばに持っていった。

イスを時計の下に置き、イスに本を乗せ、その上に乗る。

そして、私は時計の針をいじった。

哀「（だいたい昔から、こういうのって・・・針をどこかに合わせると・・・）」

チキチキチキ・・・

カチツ！

グオツ！！

哀「あ・・・キャアツ！！」

私は隠し扉の中に吸い込まれていった。
ボタン！

哀「イタタ・・・なるほど？ただの城じゃないってワケね・・・」

私は腕時計型ライトをつけ、歩き出した。

哀「！？」

私は何かに気づき、しゃがみ込んだ。
ペロツ。

哀「これは、血だわ・・・この色調と凝血の具合からすると、あまり時間はたっていない・・・ま、まさかこれ・・・工藤君の血・・・？」

私は血が落ちていた階段のそばの段に、何か文字が彫ってあったの

に気づいた。

哀「アイツは私になりすまして城の宝を横．．．？『横取りする気』
って書こうとしたみたいね．．．誰が書いたのかしら．．．？」

しばらく階段を降りた私は、キラツと光っている場所にいた。

哀「？」

グツ．．．

グル！

哀「キャツ！！」

バタン！

哀「アイタタタ．．．あ！ここはさつき博士を見失った場所．．．
なるほど？この扉の中で誰かに襲われたのね．．．とにかく、私1
人だけじゃ危険だわ．．．警察に電話をしなきゃ．．．」
私は電話の前に立ち、受話器を取って、警察に電話をかけた。

哀「あ、もしも警察ですか？」

目暮「おお、哀君か！どうしたんだね？」

目暮警部が電話に出た。

哀「私達、西洋風の大きなお城に泊めてもらってるんですけど．．．
江戸川君と阿笠博士がこつぜんと姿を消してしまっただんです．．．」

目暮警部と電話で話していた私は、正直、安心して油断していた。

目暮「それで、そのお城の場所は？」

哀「空からヘリコプターで探せば、見つかると思います．．．とにかく、急いでください．．．キャアツ！！！」

目暮「お、おい哀君！？もしも？もしも．．．」
チン。

電話が切られた。

私はどうなったのかというと、電話をしている最中に後ろから誰かに体をつかまれ、抱き上げられてしまったのだ。

哀「は、放して!!! な、何よあなた!? 放して・・・うつ!!!」

私を捕まえたその人は、私の口をハンカチで塞いだ。

哀「んむう、んむう!!!」

私はジタバタともがいたけれど、逃げる事ができなかった。

しかも、私の口を塞いだハンカチに、睡眠薬が染み込まされていた。

哀「んむむう・・・（いけない!!! これは・・・クロロホル・・・ム・・・!!!）」

私は眠らされてしまった。

私を襲った人は、私のコートを脱がせ床に放り投げると、私を抱えて連れ去っていった。

哀「うん・・・」

頭がクラクラする中、私はやっと目が覚めた。

哀「こ、ここは・・・?」

コナン「どっかの地下室だよ・・・」

哀「く、工藤君!!!」

私の横に、工藤君が座っていた。

哀「工藤君! 無事だったのね!!!」

コナン「ああ・・・無事は無事だけど・・・」

工藤君は、下を見ると私に言った。

私は下を向いた。

哀「あ・・・し、縛られてる・・・」

そう、私も工藤君も、縄で体をグルグル巻きに縛られていたのだ。

これでは、身動きがとれないハズだわ・・・

幸い、足は縛られていないようだ。

コナン「くそっ、油断してたぜ・・・」

哀「私も、電話をかけた時点で安心してた・・・でもそれがまちが
いだっただのね・・・」

コナン「何にしても、この状態じゃ脱出できない・・・」

哀「あの暗号を解いた方がいいかもね？」

コナン「ああ、あの暗号を解けば、おのずと犯人の正体がかめる
かもしれないから・・・」

哀「でもどうするの？縛られているこの状態じゃ、字も書けないわ
よ？」

コナン「心配いらねえよ。オレのポケットにメモ帳が入ってた。

それをオマエが出してくれれば・・・」

哀「わかったわ。」

私は、縛られた状態で立ち上がると、工藤君の後ろに行った。

哀「工藤君、どの辺り？」

コナン「もうちょっと左・・・」

私は後ろ手に縛られた両手で、工藤君のポケットに手を入れた。

ゴソゴソ・・・

コナン「あつ、くすぐったいよ、灰原・・・」

哀「あ、ごめんなさい、工藤君・・・」

ほどなく、私はなんとかポケットからメモ帳を取り出し、地面に置
いた。

コナン「この庭のチェスの駒が暗号を解くカギなのは、まちがいな
いだろう。」

哀「あとは、解き方ね。ねえ工藤君、チェスの駒の初期配置って確
か、上が黒で下が白よね？」

コナン「ああ・・・だとしたらこの暗号は・・・そうか、わかった
ぞ、暗号の答えが！！」

哀「え、ホント？」

コナン「ああ、とりあえずメモ帳をオレのポケットに戻してくれ。」

私はまた立ち上がり、工藤君のポケットにメモ帳を戻した。

哀「工藤君、博士は？」

コナン「博士は別の場所で寝てるよ。おもいつきり殴られたみたいだからな・・・」

哀「大丈夫かしら・・・」

コナン「大丈夫だよ、イビキかいて寝てたから・・・」

哀「でもすごいよね、工藤君・・・もうわかつちゃうなんて・・・」

コナン「オマエが手伝ってくれたからさ・・・オレ達、結構いいコンビかもな？」

哀「／／／／え・・・／／／／」

私の頬が赤く染まった。

「確かに、オマエ達はいいいコンビだよ・・・」

背後から不気味な声が出た。

コナン「哀「えっ・・・!？」」

声の主は私と工藤君の後ろから、私達の口をハンカチで塞いだ。

コナン「哀「うう・・・」」

ドサツ・・・

私と工藤君は、再び眠らされてしまった・・・

コナンと哀が犯人によって再び眠らされてから1時間後・・・

吉田歩美は部屋で目を覚ましていた。

歩美「・・・(博士と灰原さんのベッドは空のまま・・・やっぱり何かあったんじゃない?ん?)」

歩美は枕元に置いてある紙切れに目がいった。

歩美「・・・」

歩美は紙切れに目を通すと、クスリと笑った。

歩美「(フーン・・・そういう事か・・・)」

歩美は廊下を足早に走っていた。

タタタ・・・

歩美「(とにかく、調べてみる必要があるそうね・・・手遅れになる前に・・・)」

ガタ!

歩美「!」

突然鳴った音に、歩美は後ろを振り向いた。

歩美「・・・」

歩美はワザと1歩進むと、すぐに引き返した。

コツ・・・

クルツ!

ダツ!

ザツ!

歩美「やっぱり・・・」

元太・光彦「ハハハ・・・」

そこには、元太と光彦が立っていた。

歩美「2人共、何をやってるの?」

光彦「だってコナン君が心配なんです・・・」

元太「博士と灰原も戻って来ないしよ・・・」

光彦「ボク達も捜索のお手伝いしますよ・・・」

元太「1人より3人の方がお得だぞ!」

光彦「そうそう!」

歩美「いいけど・・・殺されたって知らないよ・・・」

元太「どういう意味だ?」

光彦「歩美ちゃん……？」
タタタ……
ヒタツ。

ガチャ！

元太「あれ？ここつてオレ達が昼間来た部屋じゃないか……」

光彦「でも誰もいませんよ……」

トツ！

ドサツ！

元太「おい？」

光彦「何してるんですか？」

カチカチカチ……

グオ！

歩美「おつと……」

ガツ！

元太「何だこれ……」

光彦「隠し通路ですね……」

歩美「手で時計の針を何回転かさせると、扉が開く仕掛けになっ
てたんだよ……」

しばらく進んだ歩美は、何かを見つけた。
歩美「！」

ペロツ・・・

光彦「何ですか？それ・・・」

歩美「血だよ・・・この色調と凝結具合からすると、あまり時間は経ってない・・・」

光彦「歩美ちゃん、コナン君みたいでスゴいですね！」

歩美「何ノンキな事言ってるの・・・そのコナン君の血かもしれないのよ、これ・・・」

光彦「え？」

元太「おい、何か落ちてるぞ！メガネみただけど・・・」

光彦「ちよつと、それ・・・博士のメガネじゃないですか！？」

元太「な、なんで博士のメガネがこんな所に落ちてんだ！？」

キラツ！

歩美「！」

グッ！

光彦「え？」

グル！！

バタン！

光彦「イタタ・・・」

歩美「！（これは灰原さんのコート・・・それに電話があるわ・・・確か灰原さん、あの時電話をかけようとした感じだったわね・・・なるほど・・・ここで再び電話をかけようとして、その時誰かに襲われたってワケね・・・）」

光彦「変ですね・・・今度は開きませんよこの扉・・・」

歩美「仕方ないわ。最初に入った入口に戻って、元太君と合流しよう・・・」

元太「クソツ、どうなってんだ！？さっきは開いたのよー！ん？え・・・」

ガチャガチャ！

光彦「あれ？鍵が掛かってる・・・？なんで？さっきは開いてたのに・・・」

歩美「・・・誰かが私達の後をつけてたんだよ・・・」

光彦「え？」

歩美「鍵を掛けたのは、私達が通路を引き返して外に逃げるのを防ぐため・・・私達は偶然、さっきの扉から外に出られたけどね・・・」

光彦「じゃあ、元太君は？」

歩美「後をつけていた誰かの手に落ちたとみて、まず間違いないでしょうね・・・」

光彦「そ、そんな・・・誰かを起こして来てもらいましょうよ！ボク達だけじゃ危険・・・」

歩美「誰に頼むの？今の段階でこの城に信用できる人は1人もいないわ。もしかしたら、城ぐるみであの通路の存在を隠していたのかもしれないし・・・とにかく、あの通路の別の入口を探そう。消えたコナン君達4人の生きている可能性が、まだ残っている内に・・・」

アトリエ

歩美と光彦は、アトリエにやって来た。

歩美「ここは貴人さんがアトリエとして使ってる部屋かしら？大きいわね・・・ん？新聞紙がいっぱいだ・・・絵を包んだりするのに使うのかな？でも妙だわ・・・この新聞、みんな4年前の・・・。

！？これ、全部例の4年前の火事関連の新聞だわ・・・『火事で死んだのは15名・・・骨が灰になるほどの業火で、遺体の判別は身につけていた遺品から推定されたが、内1名だけが未だ行方不明』・・・（なるほど・・・この火事を利用して、誰かと誰がすり替わったワケね・・・）

カシャン！

光彦「ん？」

タタタ・・・

光彦「（こ、これは・・・コナン君のメガネ・・・）ん？」

ギイイ・・・

歩美「あれ？光彦君がいない・・・ん？あれは火事があつて封鎖された塔・・・しようがないなあ・・・」

歩美は塔の中へと入っていった。

パタン！

カチャ!

歩美「トイレか……」

ガチャガチャ……

歩美「光彦君？」

ドン!

歩美「(ちがう、光彦君じゃないわ……どうする?このままじゃ・
・あら?この後ろに何かあるわ……)」

ドガツ!!

「ハアハア……ハアハア……」

キチキチ……

ガコ!

「ハアハア……」

ブン!

カン!

パタン!

「ハアハア……」

ギツ……

歩美「フウ……危ない危ない……あら?階段がある……降り
てみよう……光彦君がこの塔の中に入ったのなら、今の人に捕ま
ったかも……」

「!」

ギツ……

歩美「いないわね、みんな・・・でも何なのかしら、この通路？いるんな部屋や森の中にも出られるようになってたし・・・作りはかなり古そうだけど・・・ん？何かいる？」
タタタ・・・

歩美はライトを照らしてみた。

歩美「^{ガイコツ}骸骨・・・！！白骨化してだいぶ年月が経ってるわ・・・それにホコリの具合から考えると、ここに置かれて間もない感じた・・・どうやら、階段にあったあの文字はこの人が刻んだのね・・・きつとコナン君に発見されたからここに移動させたんだわ・・・」
その時、歩美はある事に気がついた。

歩美「（他の骨に比べて、足の骨だけがかなり細くなってる・・・それにこの骨の性別と推定年齢・・・まさか・・・まさかこの人になりすましてる犯人って・・・）」
マス代「どうしたんだいお嬢ちゃん・・・声がするから様子を見に来たんじゃが・・・おや？もう1人のお友達はどこかえ？」
ここで歩美は真実に気がついた。

ダッ！

歩美は一目散に走り出した。

ダダダ・・・

歩美「あの足の骨は長い間歩いていない人間の骨・・・骨の性別と年齢を含めても、あれは大奥様の遺体に間違いない！！だとすればあの人は、大奥様を殺してなりすましていた人物！足が不自由が大奥様をこの地下通路に閉じ込めて顔をソツクリに整形し、多少の事は記憶が混乱した振りでごまかしていたんだわ！実行したのは恐らく、例の大火事の日・・・さすがに実の娘は欺き通せないと踏んで、大奥様に長年仕えていた執事達と一緒に焼き殺したんだわ！この地下通路の存在を知っていれば、誰にも気づかれずに放火する事もコ

ツソリ抜け出して顔を整形して戻ってくる事も可能になる！」
ガコ！

歩美「犯人の目的は恐らく、この城の財宝……」

歩美の足をマス代がつかんだ。

ズツ！

歩美「あ……」

マス代「そうとも……それ目当てでこの城に来た事があのババアにバレてクビにされそうになったからスリ替わったのさ……声は元々似てたからねえ……」

歩美「くっ……」

マス代「安心をし……あのババアの様いつまでも暗い地下に放つてはおかないよ……気絶させて2・3日経ったら、友達と一緒に森の中に並べてあげるさあ……頬がこけてとびっきりのスマー
トさんになつたらねえ！！！」

グオー！！

ヒュオツ！！

ドカツ！！

その時、何かが棒切れを弾き飛ばした。

マス代「痛っ……」

カランカラン……

「止めなよ……」

パリパリ……

マス代「！？」

そこにはコナン、哀、光彦、元太が立っていた。

哀「子供に無理なダイエットは悪趣味よ？」

光彦「そうですよ！歩美ちゃんなら今のままでも十分です！！」

元太「そうだそうだ！腹一杯食った方が健康的だぞ！！」

歩美「（みんな……無事だったんだ……）」

マス代「キ、キサマらどうして……」

コナン「光彦のおかげさ。オレのメガネの追跡機能を使って博士の

バッジを頼りにオレ達の監禁場所を発見し、縄を解いてくれたんだ。
・・・」

哀「ね？」

光彦「ええ、あの扉に入らなくて正解でした。」

マス代「ク、クソ・・・」

阿笠「おっと！逃げてもムダじゃよ、行方不明で元召使いの西川睦美さん？アンタの正体は、知り合いの整形外科医にこう問い合わせたらすぐにわかったよ・・・」『わざわざ老婆に整形した、奇妙な客の話聞いた事はないか？』とな・・・」

西川睦美「フン・・・オマエ達もあの屍しかばねを見たという事が・・・」

コナン「遺体なんて見なくても、アンタが偽者だつてわかつてたぜ？10年間この城にこもりっぱなしで旅行もしなかつたハズの大奥様が、6年前にサイズが変わったパスポートに不便さを感じるワケねえからな・・・」

哀「でもまさかその顔を保つために、外国に何度も足を運んでいたとは思わなかつたけどね・・・」

睦美「フン・・・よくぞ見破つたとホメてやりたいが、この地下通路を熟知している私を捕まえる事はできまい・・・警察が来る頃には私はすでに城の外・・・逃げ仰せてみせるさあ・・・」

コナン「あらあら、そりゃあ残念だ・・・オレと灰原はアンタが知りたがつてたとおきの通路を知ってるんだけど・・・」

睦美「何！？ま、まさか、庭のチェスの駒の暗号が解けたのか！！？」

哀「ええ・・・あなたが暗闇の中に閉じ込めてたおかげで、考える時間がたつぷりあったからねえ・・・チェスの駒の配置は通常上が黒、下が白の陣営で、アルファベットのA〜Hと数字の1〜8で表記される！騎士ナイトの向きを踏まえて白い駒だけを数字の順に読むと、

『E G G H E A D』・・・つまり俗語で理屈をこねるインテリつて

意味・・・そう、この暗号を考えた大旦那様の事よ・・・」

タタタ・・・

コナン「後は黒の駒の形通りにその絵を左に回せば、秘密の通路の入口がポツカリ顔を見せるってワケだ・・・」
ガガガ・・・

哀「もつとも、2年前に通路に侵入してあなたに殺された使用人さんは、黒の駒の意味を『G』^{グリーン}だと間違えて、緑に囲まれたあの塔に何かあると勘違いしてたみたいだね・・・」

睦美「お・・・おおおお・・・（私がこの城に仕えて20年・・・待ち望んだ財宝が・・・あの光り輝く扉の向こうに・・・誰にも渡すものか・・・あれは私の物だ・・・私の物だ・・・私の宝さあ！！！！）」

ガッ！

カア！！

睦美「！？こ、これは！？」

コナン「扉に書いてあるだろ？」

哀「『最初にここに到達した者に、この城と景色を与えよう』ってね・・・」

睦美「ハ・・・ハハ・・・バカな・・・こんな物のために、私は何人も人を殺してきたというのかい・・・？こんな物のために、醜い^{みにく}老婆に姿を変えてまで・・・こんな・・・物の・・・ために・・・」
1時間後警察が到着し、犯人は連行された・・・

魂の抜け落ちた本当の老婆になってしまったかの様な哀れな姿で・・・

城の宝の事は満さんを残念がらせていたが、犯人逮捕を聞き、息子の貴人さんはホツとした様子だった・・・

どうやら彼は4年前の大火事を不審に思い、城に留まって密かに探っていたようだ・・・

なお、このとつておきの屋根裏部屋から大旦那様の手記が見つかり、この城の事がいろいろわかった・・・

あの隠し通路は、万が一の時王族を城外に避難させるために元々城についていた物で、歴史学者の大旦那様が移築する時に正確に復元

した物との事・・・
どこかの隠し扉が開くと、王と王妃の部屋に合図が行く仕掛けにな
っていたらしい・・・

元太「面白かったなこの城！」

光彦「まさにスリルとサスペンス！」

阿笠「おいおい・・・ワシとコナン君は殴り倒されたんじゃぞ？」

勝男「おう！貴人さんがオマエらの朝飯用意するってよ！」

阿笠「え？」

勝男「食って行きなよ！メガネのボウズは昨夜から何も食ってねえ
んだろ？」

コナン「遠慮しとくよ・・・車にキャンプ用の食料も積んであるし
・・・それに、オレにはこの子達が取り置きしてくれてたパンの方が
・・・」

そう言うと、コナンは歩美と哀からパンの袋を取った。

コナン「ごちそうみてえだしな！」

その言葉に、哀は顔がほんのりと紅くなった。

歩美「じゃあ私、呼ばれてこようかしら・・・」

元太「あ、オレも！」

光彦「じゃあボクも・・・」

コナン・哀「おい・・・」

結局、歩美と哀にもらったパンはオヤツに取っておく事にして、コ
ナン達は朝ごはんをごちそうになったのでした・・・

(後書き)

いかがでしたか？

『青の古城探索事件』をモチーフにした、3作目の分岐小説。

少し哀と歩美の性格がちがっていますが、それはこの話の展開上どうしても必要なものだったので、軽く流してくださいませれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1078c/>

意外な伏兵

2010年10月11日14時25分発行